

行政視察報告

(会 派 青 雲)

<視察目的>

地域の地域による主体的見守り体制の向上を目的として、山口県周南市が行う「もやいネットセンター推進事業」を視察し施策の参考となる事例を学ぶ。

安来市において地区中心市街地の衰退が大きな問題となっており、大分県豊後高田市の年間 100 万人の観光客を集客する「昭和の町」を視察しまちづくりの考え方、展開の仕方を学ぶ。

安来市においても「健康やすぎ 21」という施策があるが、宮崎県延岡市の医療危機から誕生した、市民意識の高い「健康長寿のまちづくり市民運動」を視察し、安来市の施策のさらなる向上のために役立てる。

安来市立病院の経営と耐震問題が課題となっている当市の今後の医療環境の在り方を学ぶために、熊本地震で災害救急医療の地域拠点となった「阿蘇医療センター」を視察する。

<視察概要一覧>

視察月日	視察先	視察施設	視察内容
平成 29 年 4 月 17 日	山口県周南市	周南市役所	もやいネットセンター推進事業について
平成 29 年 4 月 18 日	大分県豊後高田市	豊後高田市観光まち づくり株式会社	昭和の町づくりについて
平成 29 年 4 月 19 日	宮崎県延岡市	延岡市役所	健康長寿のまちづくり市民運動について
平成 29 年 4 月 20 日	熊本県阿蘇市	阿蘇医療センター	地震災害時の対応と今後の課題について 新病院建設の経緯について

<視察概要報告>

1. 山口県周南市（もやいネットセンター推進事業）

- 対応者： 周南市議会副議長 長嶺 敏昭さま
周南市議会事務局局長 藤田 真治さま
次長 末永 和宏さま

議会事務局 磯部 雄太さま
周南市地域福祉課課長補佐 山本 説彦さま
(地域包括ケア推進、もやいネットセンター担当)
周南市地域福祉課 もやいネットセンター
担当係長 宮本 隆之さま

●場 所： 周南市役所

●概 要：

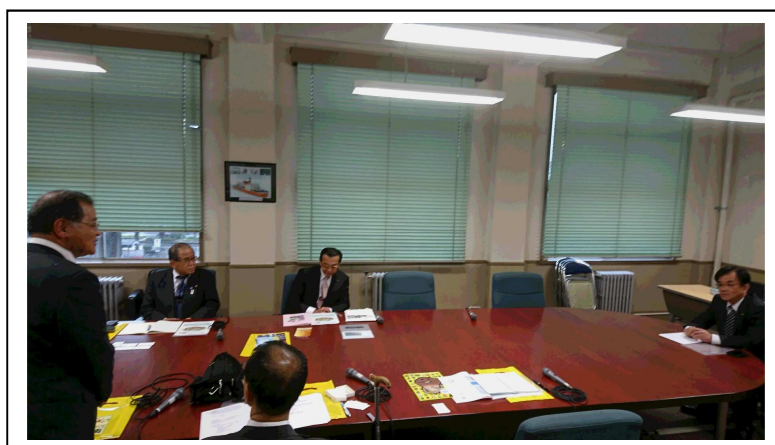
もやいネットセンターは平成 25 年 4 月に、周南市から孤独死・孤立死をなくし、見守りの統括 機関として、見守りをやっていくという当時の市長の思いで設置された。共に「支え」「つなぎ」「守る」をモットーに、高齢者をはじめ全ての人を支え、必要に応じて、関係者や関係機関とつなぎ、高齢者等を守る、様々な活動を支援。所管業務は福祉総合相談、もやいネットの充実。

-----もやいネット---『全市的な共に見守り支えあう体制』

職員体制は 87 名。うち保健師・社会福祉士などの専門職員が 4 名。

相談は 24 時間対応で受け付ける。月曜から金曜の日中については、もやいネットセンターで対応し、夜間・休日は緊急通報整備体制事業の委託先である周南マリコム(株) (以下、マ リコム) にお願いしている。ただし、緊急案件・専門対応を要する案件については、もやいネットセンター職員が常時公用携帯を携帯しており、マリコムから随時連絡が入ることになっている。

相談件数は平成 25 年度 1,450 件、平成 26 年度は 2,497 件、平成 27 年度は 2,679 件、平成 28 年度は 2,217 件。相談の内訳では話し相手や近隣トラブル等の相談全般で 40%、介護保険・福祉サービスに関することで 25%が占めている。現在もやいネットの支援の輪が広まって現在 66 事業者が参加して推進している。



<考 察>

*平成 25 年に高齢者の孤独死・孤立死を無くす取り組みとして始まった事業から市の福祉課に、「もやいネットセンター」が誕生し、現状では市民のいろいろな悩みの相談所として 365 日 24 時間体制で活動が行われている。「もやいネット」による市民との繋がり事業所との提携による地域の見守り体制を日々構築し、市が一丸となって支え合うまちづくりは、高齢化が進む安来市においても積極的に取り入れる価値があると考えられる。(中島)

*市民が、住み慣れた地域で安心して生活が出来るよう地域住民そして、関係機関等の連携により見守り活動（もやいネット）の推進状況を聞き、沢山の皆様の協力や全市的な地域の支え合いの現状が見え、安来市でも「守る」「つなぎ」「支え」そして、共につくる活動の取り組みでの参考になりました。(佐伯)

*本市でも同様な見守り体制が推進されているが、安心安全に暮らせる街づくりの為に、全市あげての対応の構築が必要であると感じた。(樋野)

※会派・青雲の夕食時に元周南市長で現在市議会議員の島津ゆきお氏を地元知人の紹介でお目にかかり、周南市の現市長が考えておられる街づくりなど意見交換が出来有意義であった。

*『見守りネットワークに入っただけ上での、何らかのインセンティブは?』と質問し、見守りネットワークに新聞配達や宅配などの、お宅に訪問するライフライン関係者との連携が多く、この連携により、見守りの輪が広がり、きめ細かくなり、地域住民に対する包括的な見守りのネットワークが構築出来ると思いました。折しも安来ならではの地域包括ケアシステムを摸索している本市において、今後の参考になると思いました。(丸山)

*地域福祉コーディネーターを全ての地区に配置し、周囲の人を巻き込んでネットワークづくりを行うと共に、市内の事業者との見守り提携を行うことにより、市全体の地域見守り意識の向上に努める事業の展開は、高齢化が進む安来市においても大変参考になる事例が多かった。安来市においても警察との連携で類似する体制が構築されているが、さらに、検討する必要性を感じました。今後の体制づくりに学んだ事を生かしていきたい。(三島)

<視察概要報告>

2. 大分県豊後高田市（昭和のまちづくり）

●対応者： 豊後高田市観光まちづくり(株)

豊後高田市商工観光課 観光振興推進室 室長

●場 所：豊後高田市観光まちづくり株式会社

●概 要：

豊後高田市は、国東(くにさき)半島の商業の中心として栄え、昭和 30 年代には中心市街地に 300 店 を越える店舗が並んで賑わった。しかし、時代の流れと共に、個人商店の対面販売はスーパーマーケットに押され、そのスーパーマーケットも郊外型の大規模店の進出によって町から消えてしまい、空き店舗が増え、人通りが商店街から消えてしまった。

1990 年代になって、衰退していく町の流れを変えたいと、町の若者たちが議論をする為に集まるようになった。昭和 30 年代のにぎわいを取り戻すために、商店主、商工会議所職員、豊後高田市職員の若手たちで、「昭和の町」をテーマに再生していくことを企画した。商工会議所と市はこれを支援し、商店街における「建築再生」、「歴史再生」、「商業再生」、「商人再生」の 4 つの再生を進めていくことになった。

2001 年、「昭和の町」のオープニングセレモニーが行われ、マスコミに取り上げられた。

翌 2002 年、豊後高田市は中心市街地に隣接する大規模な農業倉庫を利用して、「昭和ロマン蔵」を開設、これにより年間 20 万人を越える観光客が押し寄せ、「昭和の町」の本格的な観光化が進展した。

しかし、受入体制はまだ十分ではなかったことから、窓口となった商工会議所は過剰な業務を抱えることになり、これを見かねた豊後高田市は、2007 年に第 3 セクター方式で「豊後高田市観光まちづくり株式会社」(以下、まちづくり会社)を設立した。これを契機に、豊後高田市の「昭和の町」はまちづくりの第 2 ステージへと進み、まちづくり会社によるマネージメントで「昭和の町」の振興とともに、国東半島全体や農業連携に視点を向けるなど、新たな展開を見せている。

現在はビジネスホテルの建設が増え、年間 4 万人の宿泊者、着地型旅行を目指している。昭和の建築再生には県が 1/3、市が 1/3、個人で 1/3 を掛け、昭和の頃の町であった木調を施した。



<考 察>

*9年間という長い時間をかけ新しい町づくりに取り組まれ、年間100万人の観光客を集客できる観光拠点を生み出されたことは当然評価できます。しかし、それ以上にIターンやJターンの若者による新しい商業施設の創出ができていること、また、総人口は増えてはいないが若い年代が増えていること（自然減と同じ数の人口増となっている）が私としては注目する点となった。若者が自らの創意工夫で新たな産業の創生ができるまちづくりと支援体制の必要性を強く感じると共に視察で学んだ事を当市で生かしていきたいと思う。（中島）

*平成4年度に「商業活性化構想」を策定し、コンセプトとして、既存商店街へのこだわりを持ち、およそ10年におよび復興シンポジウム、市街地ストリート・ストリー等調査・研究を重ね、平成13年7月に「昭和の町」のオープンにこぎつぎ、その後もそれぞれのコンセプトを毎年作り変えながら、まちの魅力アップに心掛けると共に集客効果を高めていくたゆまぬ努力をされておられる町づくりの取り組みの情熱が伝わりました。（佐伯）

*本市に似通った面もあり、街中再生・賑わいの創出と考えているが、抜本的にその町をどう活かすか、市民を巻き込んで検討すべき課題が感じられた。（樋野）

*安来市よりも人口少なく、交通の便、立地条件が悪く、昭和のまちづくり実施前は観光入込客2万人程度が実施後に100万人突破したのは安来市で観光振興を進める上で、大きな刺激になりました。当初は市長のトップダウンで、紆余曲折ありながらも、まず7人の賛同者で進めて実績を出し、追随を増やし、根気強くやれば大業も成ると自信になりました。（丸山）

*市街地の商業の衰退を解決すべく、新しい試みをするのではなく、今の現状で何が出るか現場の普遍性を見出し「昭和の町」として新たな観光商業拠点を作り出すことによりコストパフォーマンスの高い事業を創出された事は大変勉強になりました。

安来市においても地域経済分析システム（RESAS）やビッグデータの利活用で色々な角度から町の特性を把握して新しいまちづくりに努めていかなければならないと感じた。（三島）

<視察概要報告>

3. 宮崎県延岡市

- 対応者： 延岡市議会事務局局長 甲斐 研二さま
議会事務局主任主事 浪岡 政樹さま
主任主事 甲斐 聡さま
延岡市健康福祉部健康推進課長 兼健康長寿推進室長
佐藤 欣司さま
健康長寿推進室主任主事 小原 大輔さま
主事 矢野 裕樹さま
保健師 東 達也さま

- 場 所：延岡市役所

- 概 要：

延岡市は、中核病院の医師不足等による危機的な地域医療問題が起こり、医師不足問題に対して抜本的な対策が見出せない状況の中で、健康長寿へのまちづくりが始まった。急速な高齢化が医療への負担を増大させていることもあり、地域医療を守るためには今まで以上に病気の予 防等、健康長寿への取り組みが重要になるものと考え、平成21年9月に制定した「延岡市の地域医療を守る条例」地域医療を守る取り組みと並ぶもうひとつの柱として健康長寿を目指す、基本理念をつくった。

健康長寿のまちづくりのためには、予防接種や健診など行政が主体となる取り組みと市民の主体的な取り組みの双方が重要であり、その双方がバランスよく進められる事で大きな成果を生むものと考え、平成23年1月から、他市に先駆け新たに小児肺炎球菌、HIB、子宮頸がんの3種類の予防接種について公費助成を始め、予防医療への取り組みに力を入れて来ている。また市長の就任2期目から「メディカルタウン構想」の推進を掲げ、医療産業の 振興や保健・医療の充実などにより、東九州の中核都市を目指している。このことと平行して健康長寿のまちづくりの市民運動がますます活性化して定着したとあった。

市民を巻き込んだ運動、食事、健診の3つのワーキング・グループを立ち上げ、①到達目標（成果目標と行動目標）を明確に提示しよう ②定期的に意識と活動進捗状況の把握を行い、途中で達成感を味わえるようにしよう ③健康の重要性についての学習・啓発活動に力を入れよう ④誰にでもわかる簡潔な標語と取り組みの柱を作ろう ⑤行動計画では多くのこと欲張ってやらず、効果的なものに絞って確実に実行しよう ⑥いろんな組織・団体が自主的・主体的に活動を推進していける形にしよう ⑦運動継続の為の刺激策や仕掛けを沢山取り入れよう、等と大きな目標を掲げている。



<考 察>

*健康長寿に関する事業はどの自治体でも行っているが、ここ延岡市では「1に運動・2に食事・3にみんなで健康受診」という印象に残るキャッチフレーズが市民に浸透していることが特徴である。平素の生活の中でふと思い出せる言葉の響きが健康への市民意欲の向上に繋がっていると考えられる。また、検診に対しマイレージ制を導入するなど市民が積極的に取り組む工夫をしておられる。安来市の健康長寿事業への参考となる事例が多く、今後の市政に生かせるよう意見したい。（中島）

*旭化成の城下町として発展してきた町であります。一昨年に完成した立派な庁舎で、今回のテーマである「健康長寿のまちづくり」のお話をお聞きしました。

きっかけが平成20年に延岡市にある県立病院・医師会病院での医師不足問題に端を発し「安心して住めない」「企業も人も来ない」「医師も来たがらない」の3ないの悪評は全国紙にも紹介され、イメージ回復のため平成22年より「市民運動行動計画」を策定し「運動」「食事」「検診」の3分野で各団体他、企業を取り込み、現在は全自治会が参加するほどの全市的な拡大で活動が広がっている状況と健康学習会の開催を各所で行い市民意識の向上に努めておられる貴重な研修でありました。（佐伯）

*目指す健康長寿のまち延岡市を視察して、単にこうありたいという夢ではなく、地方都市が活性化して生き残るために実現しなければならない究極の姿である と強く感じるに至りました。

活動の大きな動機の一つである医師不足のみならず、延岡には地方都市としての様々な課題があります。人口は減少し、人口流動性も極めて低いことから高齢化がさらに進むことが予想されます。しかし、これらは逆に強みにも転じることであり、目指すまちのあり方を啓示して、人口流動性の低さは市民力が結集しやすいことを意味し、皆が将来を思い、まちづくりに励む力が新しい街づくりの核となると感じました。(樋野)

*健康日本 21、スマート・ライフ・プロジェクトとの整合性や、市民運動を盛り上げる上で大手企業等との官民連携について質問しました。

スマート・ライフ・プロジェクトの中の3つのアクション+1（運動、食事、禁煙+検診受診）がある中で、運動、食事、検診受診の他、あえて禁煙を入れずに、この三つに絞った理由を伺ったところ、スマート・ライフ・プロジェクトや3つのアクション+1をご存じなかったようでしたがっかりしました。それでも、自然発生的に重なったこの3つの項目は、最重要なんだと再確認しました。やってみた感想を伺ったところ、職員は達成感があり、満足気でしたので、安来市も取り入れて、健康長寿のまちづくりを進めたいと思いました。(丸山)

*延岡市では医者不足による医療の衰退を、市民と共に問題を共有し、健康に関する市民意識を色々な活動で向上に努められた。また、集約的な夜間診療を自治体主導で行い市民の不安を払しょくするなど、自治体医療の在り方を学ぶことができた。延岡市におかれては、健康に関する事業にはまだまだ問題あるという認識で、今後さらなる創意工夫に努められるとのこと、これからも安来市の健康福祉に参考になる事例を注視していきたい。(三島)

<視察概要報告>

4. 熊本県阿蘇市

●対応者： 阿蘇医療センター 病院事業管理者・病院長 甲斐 豊さま
院長相談役 赤塚 善一さま
事務部長 井野 孝文さま

●場 所：阿蘇市阿蘇医療センター

●概 要：

阿蘇医療センターは昭和 25 年に旧黒川村 国保直診として 27 床で設立された。昭和 56 年病棟改築・一般 144 床。平成 17 年阿蘇市誕生。熊本大学医学部付属病院と連携。平成 23 年脳卒中・急性冠症候群医療連携寄付講座がスタート。平成 25 年新病院本体工事、平成 26 年 1 月現在の甲斐豊院長就任。平成 26 年 8 月阿蘇医療センター開院。一般 120 床、感染 4 床、阿蘇医療圏（人口約 65,000 人）3 市町村内に脳卒中専門医が不在。脳血管障害疑い患者への阿蘇地域からの二次救急病院への搬送等、遠隔診断などで治療開始や搬送などスピーディな対応が可能となっている。併せて昨年 4 月の熊本地震。免震構造の新病院。病院機能はマヒせず、この熊本県内の中核病院として対応されている。



<考 察>

*平成 21 年に新病院を新築する際に「免震構造」を取り入れることに、高額な建設費がかかり市民の反対の声が賛成より多かった経緯を、医院長と赤塚事務長の「後世に確かなものを残したい」という強い信念で乗り越え、平成 26 年に開院となった。幸か不幸か熊本地震の際にその機能を確実に発揮することとなり、多くの市民の生命を守ることができた。病院という市民生活に直結したインフラは、時に英断をもって機能の充実に努めなければならないと強く感じる事ができた。今後の市政運営に参考にしていきたい。(中島)

*昭和 25 年旧黒川村・国保直診の阿蘇中央病院から 66 年の歴史で、平成 26 年阿蘇医療センターとして一般 120 床・感染 4 床の中核病院として阿蘇地域の二次救急医療機能を有すると共に免震構造により災害時における高度の診療機能や広域搬送の機能（ヘリポート）への対応機能も備えている。院長のバイタリティー溢れる活動報告やコンセプトとしての地域の拠点病院として職員・スタッフとの一体感の醸成は視察通路での患者様との挨拶を目にするだけで、信頼される病院づくりの基本を感じることができた。そして、これからの病院づくりの必須項目としてBCP（事業継続計画）の大切さとこれらの計画を着実にし、企業としての導入効果を図っていくんだとの説明には力と情熱

を感じました。平成 28 年 4 月 14 日の熊本地震では耐震・免震を患者・住民が周知し避難所としての機能や救急患者さんの対応がなされ又、南阿蘇からの重傷者は高次機能病院への緊急搬送の手配など職種を問わずスタッフが協力し合えたと、それよりも増して連携とコミュニケーションで長時間勤務も余儀ない中でのお互いの協力で遂行していったと語られました。(佐伯)

*阿蘇医療センターは熊本大学病院とは遠隔地にあり、本市立病院の位置づけとは環境が違うが、病院設立時から類似するところがあり参考にするところが多く感じられた。地震災害等の問題も考え、本市立病院の機能を考え、早急に新病院の建設を急ぐ必要を感じられた。(樋野)

*熊本地震での対応、状況等を伺いました。
道路未復旧等で救急搬送に時間が掛かり、限られた『生命の時間』の中で、市民の生命・身体が脅かされる状況下、熊本病院との連携とスマホタブレット等の ICT の活用により、専門医不在時にも遠隔診断出来る手法は、安来市の地域医療にも役に立つと思いました。余談ですが、個人的な確認として、脳出血時の MRI 診断で、手術するかどうかの一般的な判断基準は、脳出血がどの程度ならという目安があるかお聴きしたところ、簡単に言って、MRI (CT) で白く映っている所 (血種) の縦×横 (ざっと面積) ×奥行 (スライス枚数で判断) で血種の体積が分かり、その 0.5 で出血量が推測出来る。一般的にはそれぞれおよそ 3 cm あれば手術を考えるとの事でした。私の場合この目で見て鶏卵大あったので、手術せずにここまで回復出来て、運が良かったとともに、治療回復に携わってくれた皆さんに感謝しました。視察後に院長から早速ハガキが届き、私の脳卒中後の身体を気遣ってくれて、こういうところから、信頼される先生、病院って違いが出るのかなと思いました。(丸山)

*阿蘇医療センターは最新の免震構造を有していたため、熊本地震の際病院としての機能を損なうことなく運営できた。また、自家発電機能と貯水機能がありライフラインの停止にも対応できたことも先見の明があったといえる。震災時に医療現場のとして活動するだけでなく、東北地震の際に十分な機能を発揮できなかったDMA Tの活動を確立し、地震大国日本の震災時の医療モデルとして素晴らしい成果を上げられたことを学ぶことができ、今後の安来市政に生かしていきたい。(三島)

以上